

2024/5/12

ルカの福音書 講解メッセージ⑤

『ルカの福音書2章25-52節 イエスはキリスト』

※ キリストの証人

「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖靈が彼の上にとどまっておられた。また、主のキリストを見るまでは、決して死ないと、聖靈のお告げを受けていた。彼が御靈に感じて宮に入ると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、入って来た。すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてください。私の目があなたの御救いを見たからです。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」父と母は、幼子についていろいろ語られる事に驚いた。また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるため定められ、また、反対を受けるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。」（ルカ2:25-35）

救い主が来られるまでは死ないとお告げを受けていたシメオンが、幼子イエスを見て、ついに待ち望んでいたキリストが来られたことを宣言しました。シメオンは、この幼子こそが旧約聖書が約束した救い主だということ、つまり、旧約聖書の預言が成就した「終わりの時」が来たのだということを語りました。キリストと出会うことによって、終わりの時が来たのだということです。

聖書が教える「終わりの時」とは、死からいのちに移される時であり、神のさばきの時のことです。さばきとは「分ける」という意味で、死から分けられることを意味します。私たちは生まれながらにして死人なので、その死が終わるとき、つまり、死人が生きる時が終わりの時なのです。キリストと出会うことで私たちはさばきに会い、死ぬ者から生きる者に分けられる時が来たのです。

このことをイエス・キリストは次のように説明しておられます。

「さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができますか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御靈によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。肉によって生まれた者は肉です。御靈によって生まれた者は靈です。」（ヨハネ 3:1-6）

神のさばきについて、多くの人が誤解しています。私たちはこれからさばきを受けるわけではなく、キリストを信じた時、神のさばきが始まったのです。

イエス様は、人が神の国を見るには、水と御靈によって新しく生まれなければならないと言わされました。水とは、悔い改めて水のバプテスマを受けるように、神の呼びかけに応答する信仰の象徴です。その応答によって御靈が靈のからだを着せてくれます。神の国を相続するには、靈のからだが必要だからです。これが永遠のいのちです。

「あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御靈によって生まれる者もみな、そのとおりです。」（ヨハネ 3:7-8）

人が、いつ神に応答して救われたかということは、風と同じで、いつどこから来たかわからないけれど、確かに吹いていることがわかると言われています。風は聖靈の象徴です。聖靈はキリストを証しする靈です。聖靈を通して私たちはキリストと出会っているのです。

このキリストと出会うことが終わりの時、すなわちさばきの始まりです。応答する者はすでに永遠のいのちに分けられたので、もうさばかれることはなく、信じない者はすでにさばかれていると教えられています。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれないと。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。」（ヨハネ 3:16-19）

神のさばきは、これから来るものではなく、風が吹くように、私たちの中に神の呼びかけは始まつていて、その呼びかけに応答することで、私たちはすでにキリストに出会っています。それが、神のさばきの始まりです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

死人が神の声を聞くときは、今です。今が終わりの時であり、救いの時です。この世界が滅びる時、最後の審判があると思われていますが、聖書にはそのようなことは書いてありません。次のように書いてあります。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

つまり、イエス・キリストを信じる者は、さばきが終わり、生きる者となったのです。それと同時に、あなたはキリストのからだを着せられ、聖霊の宮になって、神の体の器官に組み込まれたのです。組み込まれた以上、離れることはできません。ですから、私たちの人生の中心はキリストになったのです。それをこの地上で表しているのが教会です。救われた者は、キリストの体なる教会を中心に生きていくのです。私たちはどのようにして聖霊が私たちの中に吹き、応答したか知りません。でも、確かに応答して救われました。その者は永遠のいのちを持っているのです。

「また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その

後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。」（ルカ 2:36-38）

アンナという女預言者も、幼子イエスを見て、この方こそ待ち望んでいた救い主であると宣言をしました。

ルカの福音書では、羊飼い、シメオン、アンナを通して、この方が約束の救い主であることが語されました。横のつながりのない人がそれぞれ証言することで、このことが真実であることを聖書は伝えているのです。

❖ キリストの住む家

「さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った。幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがその上にあった。さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、祭りの期間を過ごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、見つからなかつたので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真ん中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお探しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかつたのですか。」しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかつた。それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことのみを、心に留めておいた。イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人とに愛された。」（ルカ 2:39-52）

12歳になったイエス様が、祭りのため家族でエルサレムに行ったときに迷子になりました。3日間探し回った両親がようやく宮でイエス様を見つけると、イエス様は、「私は自分の家にいた」と言われました。イエス様は、私の家は神の宮であると言われたのです。その後、イエス様はナザレで両親にもきちんと仕えておられます。このことは、神の子となった私たちは、肉の両親とは別に靈の親を持っているということを示しています。私たちは新しく生まれ変わり、正式に神の子となりました。私たちを生んでくださったのは、聖靈です。私たちにまことのいのちをくださった聖靈様こそが私たちの本当の親なのです。これを親替えと言います。私たちの住む場所は聖靈の宮であり、親を愛することは神を愛することです。そして、神を愛するがゆえに、隣人を愛するようになります。

その神が住まわれる場所が神殿です。神殿をめぐって戦争が繰り返されてきましたが、今神殿があるのは、地上のエルサレムではありません。神殿は、私たちの中にはあります。私たちの親は、私たちの中におられます。次のように書いてある通りです。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御靈があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」（Iコリント3:16）

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖靈の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」（Iコリント6:19-20）

私たちの中に神の神殿があつて、神は共におられます。私たちはキリストのからだの一部として造られたのです。

「あなたがたはキリストのからだであつて、ひとりひとりは各器官なのです。」
(Iコリント12:27)

キリストの体を見るようにしたものが教会です。神は、私たちが教会に属し、教会の一員になることで、キリストの体を建て上げることを学ぶようにされています。

「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」（エペソ 1:23）

「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

（エペソ 4:16）

誰もが教会の中で大切な役割があり、教会を建て上げている必要な存在です。キリストのからだの一員であるという自覚を持ち、自分は死から命にうつされて、神の国のただなかにいることを知るために、具現化されたものが教会です。イエス様は遠くにいるお方ではなく、私たちと共に住んでおられ、ぶどう木と枝のように私たちは一体です。私たちがキリストと離れることはありません。神から逃げられないと知り、一緒に生きていく覚悟を持っていくなら、愛の中に成長して、建てあげられていくのです。愛とは一つになる運動です。神は私たちを一つに引き寄せようとなさいます。教会とは神と一つになって建て上げるものだと理解していくなら、信仰が成長していくのです。教会なき信仰成長はありません。教会は神の国の影です。教会を生活の中心に置いて、生きてていきましょう。